

つくたま

特別号

大宮駅東口の
まちづくり・後編

November.2020



大宮をみる「まなざし」が変わる

まちを活かす人に出会う

揺れ動く価値観、 後背地の可能性

筆 | 福田雄亮

虫の目の視点

大宮駅東口特集の後編である。前編では都市計画の歴史的な流れを追いつつ、公共施設再編による連鎖型まちづくりにスポットを当て、行政・地元のリーダー・専門家へインタビューを試み、いわば「鳥の目」の視点でまちづくり再編の胎動を俯瞰的に読み解いた。

当初、後編となる今号では、大宮で期待されるまちの機能やあり方に着目しながら多様な担い手への取材をし、足元から現在の大宮を浮かび上げさせ、将来に向けてどうあるべきかを探ろうとしていた。前編とは逆のアプローチとなる、「虫の目」の視点だ。

そうした中、新型コロナウイルスが、やってきた。

世界を揺るがす事態が進行する中、私たちのまちはどうなっていくのが望ましいのか。まちを舞台に生活する私たちは今後、どのような生活像を描いていくと良いのだろうか——。これまで考えてきたことが加速していくこともあるだろうし、考え直さなければならぬこともきっとあるだろう。編集メンバー間で議論は数多く行われたが、今号の編集方針は「虫の目」視点が大事だということは揺るがず、むしろ重要視するようになった。

今号では、冒頭で地ならしをした上で、前半は「虫の目」視点にフォーカスし、後半は再び「鳥の目」に戻っていくことになる。読者の皆さんと目線の変化を感じながら、共に考えていきたい。

目に見えること/見えないこと、 衝撃の持続力

都市づくり・まちづくりはとりわけ手間と時間の掛かる領域だが、コロナ禍は大宮というまちにとって、どんな影響を及ぼした(あるいは、これから及ぼす)のだろうか。

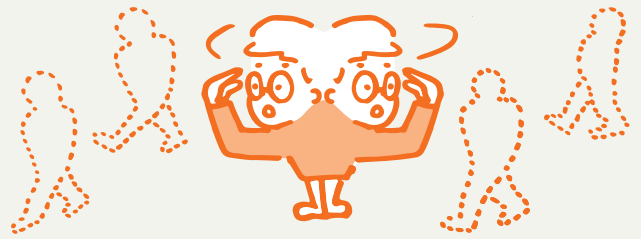
目に見える都市の姿にはインパクトを及ぼすまでは至らないとしても、一人一人の価値観については半ば常態化した「ウィズコロナ」生活の中でじわじわと変化が表出し、考え方を揺さぶられたという人も多かったのではないかな。

まちにはそれぞれルーツや目的を持つ人々が暮らし、働き、訪れるが、予期せぬ事態で、その風景は一変した。地震や水害は土地・建物の損傷や浸水という私たちを取り巻く「ハード」に対して変化をもたらすが、今回は「まちに人が居ない」「人が移動しない」という、「ヒト」の風景に変化が訪れた。

この変化は、人々の記憶に刻まれるだろうか。

我々の議論では「風景の変化は忘れ去られるかも」という意識が共有された。「喉元過ぎれば熱さを忘れる」ように。「喉元」への「熱さ」(「意識」への「衝撃度」とでも言い換えられるだろうか)は、持続力を伴うのだろうか。

「ハード」は一度損傷すると、簡単には元には戻らず、戻したり新しくするには多くの時間が必要になる。人々は、「壊れてしまった」と認識・落胆したり、「どうしようか」考えたり話し合ったりする。新たな姿に変わっていく様子を期待を胸に眺めたりする。実際に出来上がると「あの時はこうだった」と過去へ想いを巡らせたりする。そうした一連の時間の流れを自らの目でとらえるという行為は、刻々と変化するまちの風景が、一人ひとりの身体に刻み込まれていき、長い時間をかけて「衝撃度」が形を変えつつ生き延びることになるのではないかな。自然がもたらす脅威は、その地で暮らす人々に最もダイレクトに訪れ、記憶されている一方、その地に暮らさない人は心を痛めたりもするが、相対的には記憶に残りにくいだろうことは、責められるべきことではないのかも知れない。身体に刻み込まれた情報の量と質が、そもそも異なるのだから。「ヒト」の風景の変化は、大きな衝撃を伴ったかも知れない。一方、衝撃の持続力は(あるいは「喉元」に突きつけられた「熱さ」の持続度は)あまりあてにならないかも知れない。「ハード」の変化に比べると、身体に訴えかけてくる情報が少なく、衝撃の持続についても切迫した現場と日常生活が営まれる場では緊迫感が異なるからだ。大きな衝撃に関わらず、目に見えない重要なことも数多く散らばっており、雲のように掴みどころが無い。今回の騒動は、衝撃の認知の仕方にも難しさを投げ掛ける。



価値観は変化したのか

まちには「暮らす人」と「訪れる人」がいる。一方で、人々の仕事や学業など「活動」を基点にすると、①『暮らすまち「から」働く(学ぶ)まちへ「移動」する人』、②『暮らすまち「で」働く(学ぶ)人』に別れる。大宮や浦和のように鉄道アクセスに優れるエリアは東京都心へ「移動」することを前提として暮らす人も相当数いる。いわゆる、「埼玉都民」という存在であり、筆者もその一人だ。東京都心に仕事を持つ埼玉都民の生活は、自らの裁量で意思ある行動を取れる時間(言わば「可処分時間」)は限られていただろう。移動ばかりで、暮らしているまちについて気付きを得たり考えようとするのも難しかったかも知れない。何せ、暮らしている地に身体が無いのだから、受け取れる情報にも限りがある。

移動を絶たれた生活が突如として現れていた中で、まちに(定点カメラを置くように)固定して人を眺めてみると、まちから「出られなくなった」人、まちへ「来られなくなった」人、の2つに大別されると思うが、大宮というまちと、あなたとの関係は、どちらだったのだろうか。在宅勤務・自宅待機という状況に突如として置かれた埼玉都民もまた、相当数いたことだろう。好むと好まざるに関わらず、「出られなくなった人」になってしまった状況を、ど

う受け止めたでしょうか。通勤という概念が変化し、自ら選び取れる時間が増えたことは、価値観さえ変えてしまう出来事だったと言っても過言ではないかも知れない。



埼玉都民にとっての在宅勤務

職種や組織がデジタル化との親和性が高い環境にある人は、「出られなくなった人」化、すなわち在宅勤務は概ねポジティブな側面が多かったのではないだろうか。通勤という概念が無くなり家族と過ごす時間が増え、自らが暮らすまちに対する関心が芽生えたりもしただろうか。テイクアウトという「食」を通じてまちの新たな側面を垣間見たり、忙しくて顔を出せなかった地域コミュニティにも（例えオンラインという形だったとしても）参加したり探してみたり、可能性を見出した人に至っては副業や起業といったチャレンジを考えたかも知れない。大宮駅東口エリアで暮らす人には、氷川参道・氷川神社や大宮公園、見沼田んぼという「市民の庭」のような場所が貴重だと改めて認識した人もいるだろう。

ネガティブに作用した人には、東京都心が持つ「パワー」に触れられないもどかしさがあったかも知れない。ビジネスや学業では人との出会いやコラボレーションが人を成長させる大きな原動力となるが、オンラインに偏った日常では偶然的な出来事や出会いに遭遇しにくい面があり、絶えず自ら探り当てる努力が必要になる。人的繋がりが所属する組織に著しく偏り、その組織との接点がオンラインに限定されることへの不安に苛まれる、といった現象もあったのではないだろうか。通勤がなくなることは必ずしも良い面だけではなく、仕事とプライベートを切り替えることの難しさに直面するシーンも出てきただろう。あるいは、在宅勤務をしたくても職種や組織がデジタル化との親和性が低かったり通信環境が整わず、移行出来ないという場合も考えられる。



「家」と「庭」/「曖昧な空間」が持つ意味

そんな中、筆者はどちらかと言うと在宅勤務中心の働き方への変化を前向きに受け止め、地域と関わる頻度を増やしたりするなど、新たな日常に馴染もうという模索が続いている。例えば、自宅を囲む塀を壊して、近所の人と対話出来る空間を作ってみてはどうだろうかと考えている。15年ほど前、尊敬する方から、『「家庭」は「家」と「庭」がセットだからこそ、育つのです』という言葉を受け、当時もとても響いたのだが、今はその言葉の重みが更に増している。かつての日本家屋は、家と庭を繋ぐ存在として縁側があり、深い軒下空間が曖昧ながらも緩やかに内と外とを接続していた。都市の戸建住宅はコンパクト

な土地事情に拍車がかかり、軒は浅くなり、家は「住まうための箱」へ特化し、「通り」や「まち」との接点は閉ざされてしまっているように見える。

「曖昧な空間」は「余白」と言い換えられるかも知れない。まちというスケール感での空間についての考察は、今号の後半で詳しく触れるが、そういった集合的な空間を考える時には、一人ひとりが持つ「個」の空間を安心して心地良くシェア出来るだろうか、という事も忘れずに考えたい。



「後背地」のあり方

暮らしている地域に行動エリアが限定されるという特殊な状況に晒され、人々が見出したのは駅や中心市街地の「集積」よりも、むしろ公園や自然などへの接続性など、「分散」だったのではないだろうか。大宮は、東京から北へ伸びる全ての新幹線が停車するという交通の要衝でありながら、先ほど述べたように広大な「市民の庭」たる氷川参道・氷川神社や大宮公園、見沼田んぼを抱えている。首都圏では類を見ないユニークな立地特性を持っている。鉄道や商業の集積は、大宮を大宮たらしめる重要なキャラクターであることは間違いがないが、前編（情報紙9号）の最後に作山先生から示唆を頂いたように、改めて着目をすべきは「後背地のあり方」ではないか。

まちの変容は、トップダウンで進む中心地のあり方よりも、意思を持ち自発的に動く個人やその仲間の放つエネルギーが滲み出てくるような「外れた場所」、すなわち「後背地」のあり方から起こってくるのではないだろうか。歴史が醸し出す独特な空気感や緑豊かな環境に触れられる「身体性」を伴った、人の五感に訴えかけてくるような場所は、自らの手で触れることのできる感覚を呼び起こす。その感覚を大切にすることは、人々の行動変容を生み出し体験価値を変える原動力になることだろう。その地に暮らす人たちの内面に意思が生まれぬまちは、いくら便利であろうとも人々から愛されることは無いだろう。

次頁以降、意思を持って大宮に関わってきた先人と共に、具体的な「虫の目」目線に潜り込んでいきたい。



謝辞
前編に引き続き、今回もアーバンデザインセンター大宮(UDCO)の皆さんには、度々の取材協力や資料提供に添えてもらいつつ、まちづくりの現状や様々な取り組みをご教示頂きましたことに、感謝を申し上げます。

変容する WORK×LIFE 大宮への投影

筆 | 三浦 匡史

ウィズコロナの時代、都市はどのような姿となっていくのか、都市生活者はどのような生活像を描くようになるのか。

地域の個性や多様性が求められる一方、東京一極集中や短期的な経済性追求による都市の均質化の流れは変わらなかった。そうしたなか、世界全体を襲ったパンデミックは「不気味な姿の変革をもたらすもの」=「黒船」とも感じた。対応を迫られている感染症に備える新しい暮らしや都市のあり方の模索は、都市防災の機能強化や公共空間の余剰活用(稠密から開疎への転換)につながり、市民一人一人のWORKとLIFEの近接化(移動の見直し)や身近な地域でのつながりの獲得という価値観に落とし込まれていくのではないかと。大宮には、新しい暮らしの萌芽を感じさせる先駆者がいる。ウィズコロナ時代のスタンダードとなるはずの都市と都市生活者との関係性を予感させる実践がある。そのような人々との対話を通じて、大宮というまちにおける変容するWORK×LIFEのあり方を浮き彫りにしてみたい。

大宮のまち商いの可能性を拓く

交通の要衝でヒト・モノ・情報が日々行き交う大宮は、いわば雑多な魅力が混じり合う入江だ。大宮の特長を活かしたまち商いの可能性を徹底的に考えるまちづくりとは？

① コロナ禍で再認識される大宮の強み

新型コロナウイルスの感染拡大の影響は大宮でも深刻だ。飲食店を中心に多くの店が閉店寸前まで追い込まれ、実際に閉めた店もある。星野さんは、そんな状況下でも一つの業態の枠に収まらず多様なビジネスを展開することで環境変化に強く柔軟に対応できると実感したという。コワーキングスペースの全国レベルでの成功例といえる「7F(ナナエフ)」は、コロナ禍以前から芽生えていたテレワーク推進のリモートオフィス需要をと

らえていた。シェアオフィスビジネスを手がける中で、東日本の対流拠点たる立地条件を有する大宮は、首都圏の中でもウィズコロナ時代の企業戦略上重要なポジションを得られるはずだと考えている。

② 余白が少ない大宮ならではのまち商い
まちぐるみで共同して商売する商店街などの活動は長期減退傾向

だった。ホコ天やまちなかイベントは継続実施されても、個々の事業者の関わりには温度差があった。コロナ禍をきっかけに、自らの店舗空間から屋外に出てビジネスをすることに活路を見出そうと関心が全国で高まっている。しかし、大宮は道路空間に余地が少ない。そこで空き物件の流動化と合わせて空間をシェア活用する新しい視点の共同型まち商いが面白い。星野さんと栗原さんの連携から生まれたシェアキッチン「CLOCK KITCHEN」やインターネット配信スタジオ「Chimeo」は、大宮型共同まち商いの興味深い先駆事例だろう。

③ 大宮 = 雑多な〇〇が混じり合う入江

大宮の不動産オーナーの多くは経済的に飢えていないため、空き物件が活かされず眠っている例が多い。不動産価格も高いので新しいチャレンジが生まれにくい。そんな大宮で、若い人や外部の人間のアイデアを活かすには、警戒心が強く保守的な不動産オーナーに信用を裏付ける地元の人間の仲介コーディネーターが不可欠だ。地元の人間のネットワークの密度が濃く



多彩であればあるほど、新たなまちづくり事例が生まれる可能性が高まる。多様性が環境変化への対応力を高めるように、趣味や遊びの領域も含めて多様なチャンネルを持って活動するユニークな雑食性の人の重なりが、大宮のまちをしなやかに強くする。スマートや洗練という表現とは異なり、まちも人も雑多であることが魅力の大宮。

公共施設再編やGCS構想なども、その特性や課題を踏まえたまちづくりであって欲しい。事業者もまちづくりに関わる行政職員も、分野を限定せずに殻を破ってまちに入り込み、何ごととも面白がりネットワークを広げる遊び心を持って欲しい。

Keyword

GCS構想 [大宮駅グランドセントラルステーション化構想]

大宮駅を中心に東日本の対流拠点となるよう、乗り換え利便性を含めた大宮駅の高度化、交通基盤整備、周辺街区のまちづくりを三位一体で打ち出す構想。

対話した人

栗原俊明さんと星野邦敏さん

栗原さんは大宮東口における商店街組織のキーパーソン。大宮銀座商店街に面するビルオーナーの顔とともにまちの数々のイベントを起すプロデューサーの顔も持つ。その栗原さんのビルでコワーキングスペースを運営する星野さんは、企業経営のノウハウを活かした地域事業活動の起業家としても注目の人だ。

多様な選択肢が与えられる 大宮での暮らしの 奥深さを体現

見沼田んぼを活かした食料生産、コンテナハウスのコワーキングスペースの外にはバーベキュー&キャンプサイト、必要な時には気軽に都内へ出かけられる…。遊びと仕事が半分半分の多彩な生活様式が可能な大宮。

①縄文人の生き方に学び大宮で暮らす

岡野さんは、個人の利益ばかりを追求して他者を顧みない生

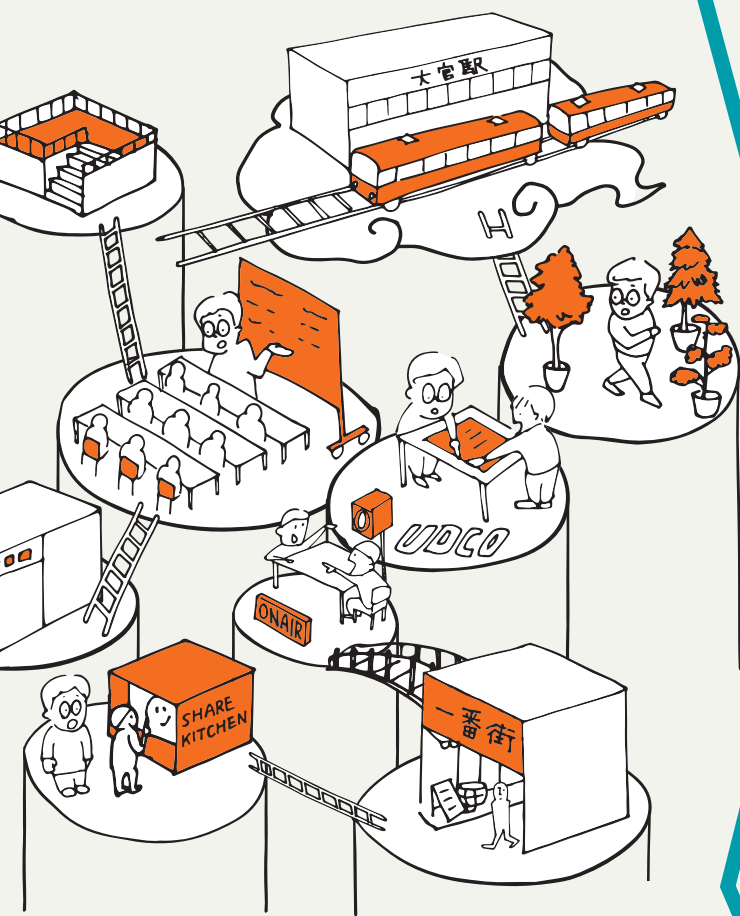
対話した人
岡野友敬さん

岡野さんは2017年度から2019年度まで芝川小学校のPTA会長を務め、ヤギの飼育を通して大人の関心を学校に向かわせ新しいコミュニティを結び直す「ヤギ部」を創設した。生まれは大宮区北袋。現在は見沼区中川に自宅兼アトリエを構える画家でデザイナー。アーティストとしてのスキルをPTA活動や地域活動に活かし、見沼田んぼを抱える大宮で暮らしを楽しんでいる。

③資源を活かしコミュニティをデザインする

さいたまの様な都市では、自分さえ良ければと考えて他者に無関心に生きていくこともできてしまう現実がある。芝川小学校は立地条件的に大人の目線が届きにくいという課題がある。岡野さんは、義務的なことが多く負担感が大きすぎて余裕や楽しさが感じられにくいPTAや地域活動に、強要ではなく、できる人ができるときに楽しく担える仕組みを作りたいと考えてヤギ部を始めた。ヤギという意表を突く存在が、自然と大人の目線を学校に、通学路に向かわせる。ヤギの飼育は糞が土に返ることを教えてくれるし、飼育小屋でつくる堆肥を市民農園の利用者が活用し循環が生まれている。プロ

のデザイナーとして収入にならないのは厳しいが、持てるスキルを出し惜しみしない。PTAや地域活動のちょっとした資料や掲示物でデザインの力を示すことができる。地域に目を向けて貰うきっかけをデザインする。



き方に疑問を投げかける。縄文時代の人々の暮らしがそうであったように、自身の外側に豊かさを育て、共有し、次代に伝える生き方をしたい、素直に他者のためになることをして感謝される生き方をしたいと語る。縄文文化が花開いた見沼田んぼ周辺では、そのような幸福な生き方ができるのではないかと。

②見沼田んぼを擁する大宮の強み

駅からわずか10分の距離に田畑が広がり芝川がある大宮では、都市の便利さと田舎暮らしの良さを両方を欲張れる。地方に行けば自然はもっと豊かだが、人口が多い大宮は自然を感じながら人との関わりも求められるところが強みだ。都市防災の重要性が高まるなか、見沼田んぼは貴重なオープンスペースであり、日常的に都市住民がその空間を食材づくりに活用することで非常時の食の安全も高まる。縄文人が食べていたドングリ食を復活させるのも面白い。

市民が主役の 大宮カルチャーを創造

対話した人
出口朱輝さん

現役の埼玉県庁職員の出口さんは、伊奈町で生まれ育ち浦和の高校に通う学生時代に大宮で遊んだ記憶を持つ。いわば大宮は青春のまち。サクソフォンを奏でる演奏家でもあり、せせらぎコンサート市民企画委員会やアートフルゆめまつりなど、大宮を舞台とする市民が主役の文化活動を数多く企画し牽引してきた。

大宮は経済規模の大きな都市だが、大資本や大手マスコミの戦略などに拠らず市民や地元の事業者が自ら企画実施しているイベントが数多い。いわば「企画市民」が活躍するのが大宮の特長であり魅力だ。

①大宮のストリートカルチャーは市民が主役

出口さんは、公民館と中学校の連携事業だった「せせらぎコンサート」を、市民主催のまちのイベントとして引き継ぎ、2008年には「アートフルゆめまつり」を始めた。大宮には、市民が創意工夫を重ねて企画実施するイベントが数多く、行政との連携も盛んだ。そのような市民が主役の大宮カルチャーは、一見すると外部へのアピール力には欠けるかもしれないが、地域内の人と地域外の人とが混じり合う機会を生み出し、大宮に多様性と賑わいをもたらしている。

②まちづかいする市民から見た大宮の魅力

余白の少ない大宮のまちなかで、何か新しいことを始めるには制約が多い。しかし、あまり活かされていないビル前空地やピロティなど、ちょっとした空間を創意工夫でイベント等に活用できれば、まちなかに後背地のような新たな興行きを生み出せる。空間の物理的有限性に捕らわれなければ、空間の使い方の発想は無限に広がる。自由な発想で自発的にまちづかいする市民の存在と、それを受け入れる大宮というまちは、市民とまちが相互に育て合う関係性をもっている。

③一人で複数の顔をもって地域に生きる

自発的にまちづかいする企画市民は、何らかの仕事や専門性を担うプロフェッショナルの顔ももつ。一人の人間の中に、お金を得ることを前提とする仕事としての活動領域と、お金を度外視できる趣味人やボランティアとしての活動領域がある。個人的にも、またまちづくりやまちづかいに関する活動体においても、一人の人間の多面性を適切に扱うことができれば、まちのマネジメント力は高まるに違いない。



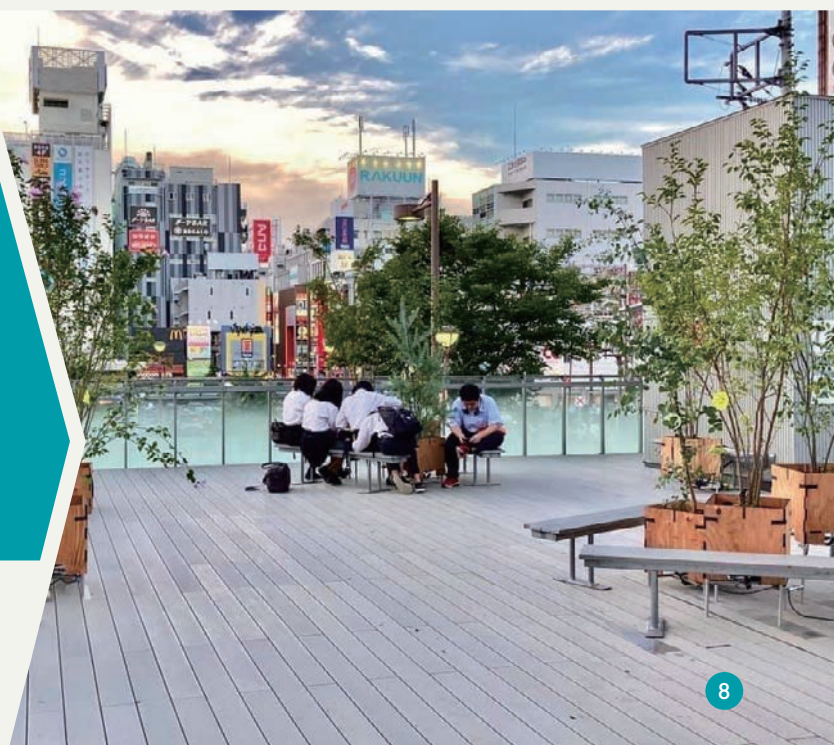


6



7

- 1 シェアキッチン「CLOCK KITCHEN」(提供：星野邦敏)
- 2 インターネット配信スタジオ「Chiemo」(提供：星野邦敏)
- 3 せせらぎコンサート(提供：出口朱輝)
- 4 芝川の土手でヤギと散歩する岡野さん
- 5 アートフルゆめまつり
- 6 つきのとかがげプロジェクト(提供：つきのとかがげプロジェクト)
- 7 おおみやストリートテラス@一番街(提供：UDCO)
- 8 ストリートプランツプロジェクト@OM テラス(提供：UDCO)
- 9 今後の利活用に期待がよせられる旧大宮図書館



8

まちを活かす人たちと、 語り合いませんか。

今号の編集を通じ、編集メンバーは膨大な量の議論を重ねてきました。紙面に書き切れなかったこと、言い足りないことも数多くあります。そして何より、この特集を読んで頂いた皆さんとの対話から、まちへの理解を更に深め、次なる実践へと向かっていきたいと考えています。

特集テーマや、お話を聞かせて頂いた皆さんから得たヒントを片手に、まちへ出向いての連続トークイベントを企画しています。大宮はもちろんですが、さいたま市内各地へ足を運んで、少し外から大宮を眺めてみたり、特集で深掘りした大宮東口と対比しながら読者の皆さんのまちについても一緒に考えてみませんか。詳細は今後、つくたまホームページやFacebookページに順次UPLしますので、是非ともご参加頂き、皆さんの声を聞かせてください!

つくたまHPIは
こちら



Facebookは
こちら



9

大宮駅東口 周辺エリアで 公民連携を 成功させたい

筆 | 若林 祥文

UDCOが創り出す 公民連携の集合知

2017年にUDCOは、市民と市役所が大宮駅周辺戦略ビジョンを強力に推進する目的で発足した。戦略ビジョンを実現していく複数の方向を提示しながら、柔軟にまちの変化に対応していく。それはUDCOが発行するアニュアルレポートに掲載されているUDCOアクションプランの2か年分を見ると、関わっている複数のテーマやプロジェクトの深度や展開の方向が示されている。



大宮駅東口周辺エリアのプロジェクト分布図
(UDCO作成資料を本稿に合わせ編集)

藤村龍至UDCO副センター長は、2010年に策定された戦略ビジョンの更なる10年後に向けた展開を計画者の目で見通している。ビックプロジェクトであるGCSや連鎖型公共施設再編を実現していくには時間がかかる。これまでの市街地整備の傾向は、まず大きな公共投資で見本を示して民間の整備を引き出す構図であった。この公共先行、民間後追い方式は先導する個別の事業を成り立たせるために、容積緩和・補助金等のアメを投入する。結果として地区に内在し、波及する可能性を吸い取ってしまうために、しばらくは次の事業までの空白期間が生じてしまう傾向があった。これに対してUDCOの戦略は、おおみやastreetテラスなどの小さな社会実験によりまちの変化を積み重ねて、大きな公共投資を軟着陸させる民間・公民連携先行、公共後追いの戦略的なプログラムである。

ソーシャルアーキテクトを標榜する藤村氏は、アーキテクトはコミュニケーションの下部構造に関わるという再定義をして、オープンプロセスのソーシャ

ルデザインを提唱している。多数がグループワークして進めるスタディは無責任な匿名性を排除して、熟議の議論・検討が行われ模型などで変更履歴として積み重ねられて集合知を形成していく。

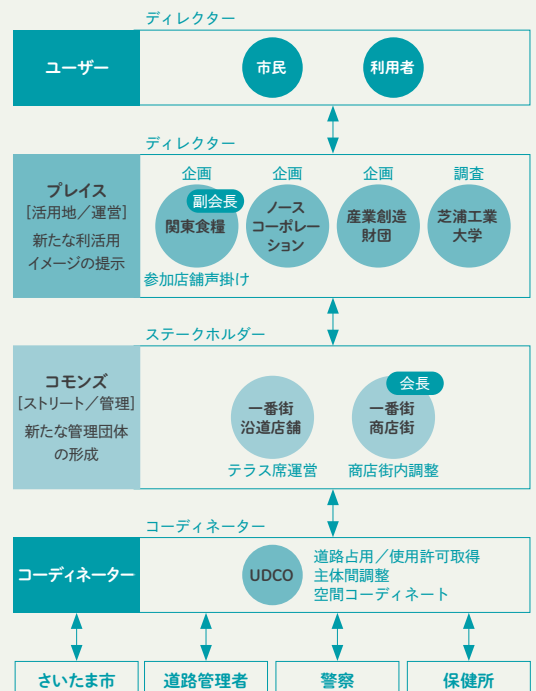
UDCO設立に先立つ2013年から2016年にかけて、大宮駅東口を舞台にした学生たちのアイデアコンペイベントがあった。複数のグループによる提案を模型にして将来のまちの姿を示す複数の選択肢が提示され、私たちも見ているだけでも楽しく、まちへの関心も意欲も

高まった。こうしたオープンプロセスが更に創意工夫されていくことが大宮のまちに眠っている可能性・タネを目覚めさせていく。その頃から、

タネは蒔かれて大宮のまちの土壌がUDCOに結実したと言えるのではないだろうか。大宮のまちの可能性を引き出していく都市再生のプラットフォームの構築が実現した。

UDCOが取り組む おおみやstreetテラスは まちの地の部分を育てていく

UDCOが取り組んでいるおおみやstreetテラス(令和2年度の土地活用モデル大賞で国土交通大臣賞を受賞)を始めとする一連のプロジェクトは、大宮市街地の弱点ともとれる道路を取り上げ、道路+沿道=ストリートに着目して、沿道の関係者と丁寧な会話を重ねて、小さな社会実験で多様な参加者を増やししながら未来の選択をしていく。前章で取り上げた企画市民たちは決して例外的な存在ではなく、そうした



おおみやstreetテラス@一番街の推進体制図(UDCO作成資料を本稿に合わせ編集) 様々なプレイヤーが加わり、活動の盛り上がりを支えている

Keyword

アーバンデザインセンターUDC

地域の課題に取り組む公民学の組織連携プラットフォームUDCは全国に21ある。法人・任意団体、常勤職員の有無、事務所の場所の確保など運営形態は様々。アーバンデザインセンター大宮UDCOは一般社団法人で、地元の関心の高い人達からの支援を受けて市役所の施策に位置づけられている。常勤スタッフ、事務スペースを確保し、具体的な事業を行っているなど優等生的な存在。

対話した人

藤村龍至さん

UDCO副センター長/東京藝術大学准教授

2012年10月まちづくり団体「大宮駅東口協議会(OEC)」の勉強会に建築家・工藤和美東洋大学教授と一緒に来てから、大宮のまちとの付き合いが始まった。ソーシャルアーキテクトであることを宣言し、10年・20年と先を見通す時代感覚を研ぎ澄ます。ICT社会における建築家という職業は下部構造を支える表現者である自覚、また、自治体が抱えている老朽公共施設問題にも取り組む。日本列島を見渡す複眼的な視点を持ち大宮のまちに関わる。

Keyword

オープンプロセスのソーシャルデザイン

建築模型やICTなどを利用して、計画案の変更履歴・閲覧など複数の関係者との協働作業を見える化する。鶴ヶ島や大宮でのプロジェクトにおいては、複数の学生グループが市民たちと提案模型を前にして議論を積み重ねていった。特に、鶴ヶ島では老朽化するインフラの見直しをテーマに、小学校と公民館の床面積を減少させる統合化プロジェクトを市民に公開しながら行い、関心を高めた。

人たちとの協働作業が生み出され大宮のまちかどで展開されるおおみやストリートテラスへの期待だ。新大宮区役所・図書館が面している氷川緑道西通線は完成時には緑豊かなまち並みを期待したいが、それを先取りする社会実験「ストリートプランツ」が2020年から取り組まれている。第1期は沿道の方々や植木生産者とストリートプランツを置く方法などの連携方法を試行した。第2期は沿道に面する民間敷地に心ある市民が木陰や小さなベンチを付けた植栽ボックスをまちかどに置くことを意図しOM TERRACEで事前にモデル展示をした。また、この道路の拡幅部分を利用して、**新型コロナウイルスでダメージを受けている飲食店がストリートランチを始めている光景は余剰地に花を咲かせていくストーリーを紡いでいるように見える。**

そして、コロナ禍にあって打撃を受けている商店街・一番街でも、おおみやストリートテラス@一番街をUDCOがコーディネートした。担当されているUDCOの新津瞬さんにお話をお聞きすると、民間企業と一緒に態勢を整えて事業を始めた。地元民間企業が日頃の個々の商店の付き合いから事業への参加を働きかけ、UDCOが計画立案やデザイン、役所への諸手続きの役割分担体制を整えた。おおみやストリートテラスに新たな推進ツールが編み出されたと思う。

また、おおみやストリートテラスにはまだまだいろいろなデザインアイテムがある。沿道経営体、広場など、それらに音楽やアート活動・イベントなどが付け加えられれば相乗効果は抜群だろう。そのデザインスキーム(沿道経営の体制)は、それぞれのストリートが目指す目標で様々な主体的に変容されていくのであろう。

公民連携のキモは人 みんなのwillを集めてみたい

ヒアリングをしてきたなかで「公務員には鎧を脱いで付き合ってほしい」という意見があった。それをさいたま市役所の島田正樹さんに投げかけてみた。**まちで動く主体としての公務員は不可欠な存在だが、必ずしも民間の方々との日頃の関りはスムーズとは言えない。地域を良くしたいという思いは同じでも、面と向かうと対立しがちな両者である。**

島田さんが2018年から取り組んでいる「つきのとかげプロジェクト」は、さいたま新都心で働く人たちのコミュニティをつくりたいと、月1度の朝活やヨガ体験会などを開催している。そこでは折り紙WSや清掃イベントなど**家族で参加できる場も意識して実施してきた**という。ここに集まる人たちは、それぞれが〇〇したいという気持ちwillを持っている。**まちに向けられるwillという将来への眼差しは様々な立場の多くの人たちを結び付け、次のステップが期待できる。**つまり、willという前方に向ける視線が市民たちのそれと絡み合い、いろいろな成果が紡ぎだしていけるだろう。それらがストリートテラスプロジェクトに織り込まれていくことで多様なデザインスキームが産まれてくる。

もう一つ、注目したい取り組みがある。2018年8月29日夕方、市役所本庁舎東側の広場で

対話した人

島田正樹さん

さいたま市職員として働きながら、NPO活動、講演や研修の講師、執筆、ワークショップデザイナーなどに取り組む“公務員ポートフォリオワーカー”として活動。

NPO法人二枚目の名刺で「公務員×2枚目の名刺プロジェクト」のプロジェクトデザイナーとして、公務員が2枚目の名刺を持ちやすい社会的な雰囲気づくりに向けて、情報発信や場づくりに取り組む。島田さんにお話をお聞きして、参加者の〇〇しようというwillを大事にすることが基本だと強く感じた。

の光景は驚きであった。日中、小さな子供たちが水遊びをしたりしている光景はおなじみであるが、夕暮れ時から広場周りに露店がでて大勢の市民が夕涼みを楽しんでいた。翌年も更にパワーアップして開催された。これは浦和で育て中のパパたちが新しい活動組織をつくり取り組んだイベントで、彼らは一般社団法人うらわClipを設立し、活動の場を市内のお店や別所沼公園、伊勢丹浦和店の屋上などへと次々と広げていった。それらの活動に深くかかわっている宮本恭嗣さんは、**市民たちの活動もさることながら、それぞれの場での市役所担当課職員たちがまたやろうという姿勢に注目している。**その成果が敷地内におけるランチタイムのキッチンカーでもある。これらは優れた**公民連携は人が創り出していく**という事例である。浦和で育てた取り組みが大宮のまちでも展開していく可能性を見出していきたい。

対話した人

宮本恭嗣さん

2018年4月からさいたま市役所のPPPコーディネーターとして着任。市内で展開されている公民連携の動きを公私にわたり、関わっている。

PPP: Public Private Partnershipの略で、公民連携あるいは官民連携と訳される。

Keyword

一般社団法人うらわClip

「一般社団法人うらわClip」は地元のパパ友たちが立ち上げた。うらわ横串ミーティング、うらわLOOPなどを市内各所で開催している。2020年12月5日には、うらわLOOP☆ドライブインLIVE & Marcheをイオンモール浦和美園にて開催予定、渦巻のようにどんどん市民や企業を巻き込みながら大きく展開している。

旧大宮図書館利活用プロジェクトは これからの大宮東口周辺エリアを大きく 育てるチャンスだ

大宮駅東口周辺エリアを主要舞台にしたさいたま国際芸術祭2020はコロナ禍で延期となった。筆者は2019年10月から、芸術祭の先行プログラム・市民プロジェクトである旧大宮図書館で障がい者の方たち、芝浦工業大学生、市民たちとのまぜこぜ精神のアートワークショップに参加した。バリアだらけの建物で障がい者と一緒アート事業を開催できるだろうかという重い問いかけを抱えながらの3回のワークショップであった。重い車椅子利用者を3階にみんなで苦心しながら運び、そこからの参道の景色を共有できた。芸術祭で旧大宮図書館は、イベントや市民プロジェクトなどを開催するアートの孵卵器の役割を果たしてきた。**現代アートは良くわからないと言われるが、社会的な課題への感性が鋭く、様々な対立場面などを鮮やかに表現し、コミュニケーションの場づくりに有効だと思う。アートは大宮のまちを育てていく重要な変身・成長プログラムだと思う。**芸術祭のテーマであった花は一斉に咲く機会を失ったが、タネはさいたま市内、特に大宮では蒔かれた。「大宮駅東口公共施設再編連鎖型まちづくり」では「氷川神社周辺エリア」として位置付けられ旧大宮図書館利活用プロジェクトが先行して始まる。先ごろ、事業者チームが決まった。公民連携による新たなスキームを提示し、大宮のまちを育てていく重要な試金石である。

Keyword

旧大宮図書館活用プロジェクト

事業の優先交渉権者としてOMIYA COMMON LIBRARY(戸田建設株式会社 関東支店(グループ代表者)、株式会社キャンパス、戸田ビルパートナーズ株式会社、一般社団法人バイクロー)が決まった。

大宮のまちを 取材して 見えてきたこと

筆 | 古里実

ウイズコロナ・ポストコロナの視点で 大宮のまちづくりを考える

新型コロナウイルスによるパンデミックは、公衆衛生問題である。歴史をたどれば、都市計画の起源も大都市の公衆衛生問題であった。19世紀、イギリスでは産業革命により農村から都市へ労働者が急激に流入し、圧倒的に不足する住宅と下水道等の未整備もあってコレラや結核が蔓延した。こうした問題に対応する保健医療とともに、不足する下水道等の都市インフラや住環境を整備してきたのが都市計画の始まりである。

それでは今回のコロナにたいして、都市計画やまちづくりの分野で何ができるのであろうか。都市空間は感染症に対してすぐに変化して対応することはできない。都市空間は少しずつ時間をかけて変化し、かつ、もともとあった空間に規定される。したがって感染症であるコロナの性格から考えると、まず今ある「都市空間の使い方」が問われることになる。コロナに対する優れた「都市空間の使い方」が重要になってきている。

また、コロナは、まちのハードは何も壊しはしないが、緊急事態制限下の「ステイホーム」やその後の「新たな生活様式」によるソーシャルディスタンス等が求められ、様々な日常生活の資源が奪われる「災害」への対応の問題とも言える。今、「災害」への対応として求められているのは、東日本大震災でも指摘されたように「災害」にあった後に「回復する力(レジリエンス)」である。

コロナの問題は、長期戦になると見込まれるため、本稿では、情報紙9号編集後記で予告した大宮のまちづくりに関わる市民やUDCO等の取り組みをウイズコロナやポストコロナの観点で取材し、コロナ禍の次を見据えた大宮のまちづくりを「都市空間の使い方」や「回復する力」に焦点を当てて考えてみた。^{*1}

*1：参考文献
饗庭伸「都市のコードを書き換える - COVID-19と都市計画」
村山顕人「都市計画研究ノート」

コロナ禍を契機とした変化

コロナ感染症対策としての緊急事態宣言下や「新たな生活様式」の提起による様々な実践を契機に我々の暮らしや都市空間の使い方はどのように変わっただろうか。表1に整理してみた。

①望ましい都市空間の使い方

密から疎へ

まず、①の望ましい都市空間の使い方は、「密から疎へ」と提起された。「アメリカ大都市の死と生」の著者でニューヨークの現在を築いたと映画でも紹介されるジェイン・ジェイコブスのまちを元にする4大原則(1. 街路は幅が狭く曲がっていてブロックは小さいこと、2. 再開発しても古い建物をできるだけ残すこと、3. 各地区は必ず二つ以上の働きを持たせること、4. 各地区の人口密度が十分高いこと)をみても、都市の魅力は明らかに「密から疎へ」ではなく「疎から密へ」により成立すると考えられてきた。一方、「過密」は歴史的には前述の公衆衛生上の問題を引き起こし、現在も残る密集市街地などでは地震災害の危険性も指摘され、都市の安全性を確保する上での課題となってきた。コロナ禍にあつての「密から疎へ」の提起は、都市の魅力を保つ密度を確保しつつ、かつ、安全性を確保するための密度を調整する、いわばチューニングの作業ととらえることができる。その際、都市の「余剰空間」の活用が不可欠となる。

②働き方

都心通勤一択から在宅勤務・テレワーク併用へ

エッセンシャルワーカーは緊張を強いられる勤務へ

③都市空間への気付き

「駅までのまち」から「まちの奥行と後背地」の気付きへ

②は働き方の変化であり、③はそのことによる都市空間への気付きである。コロナ禍の中で、東京へ通勤していたさいたま市民の生活は、緊張が強いられている医療、福祉、物流などに携わるエッセンシャルワーカーの方がいる一方、多くの方が在宅のテレワーク併用という形に変わり、働くことと生活が近づき、家庭と地域への気付きが生まれつつある。

自宅から駅までの通勤範囲でしか大宮のまちを知らなかった人たちが、例えばまちの中に埋め込まれていた小さいお店や路地などほつとできる空間や、氷川参道から東側の大宮公園、見沼田圃など大宮の奥行と後背地の魅力に気付き始めている。

④人口

東京が首都圏の中で転入超過から転出超過へ

④の人口について、「東京が首都圏の中で転出超過へ」の変化は、すでに2018年に埼玉県は東京都に対して6,078人転入超過するなど、首都圏の中で、その兆候は現れていた。三浦展は著書「首都圏大予測(2020光文社新書)」の中で、東京から埼玉への転入増の主体は団塊ジュニア世代と分析している。コロナ禍はそうした人口の動きをさらに加速すると予想され、最近の新聞報道でも、在宅勤務が脱都心の契機となり、東京は転出超過が生じていると紹介されている。^{*2}

*2：「在宅勤務、脱都心の契機、東京一極集中変わる?」朝日新聞2020年9月9日

表1 コロナ禍を契機とした変化

①望ましい都市空間の使い方	密から疎へ
②働き方	都心通勤一択から在宅勤務・テレワーク併用へ エッセンシャルワーカーは 緊張を強いられる勤務へ
③都市空間への気付き	「駅までのまち」から 「まちの奥行と後背地」の気付きへ
④人口	東京が首都圏の中で転入超過から転出超過へ
⑤都市づくり	「大都市」の時代から「超都市」の時代へ

⑤都市づくり

「大都市」の時代から「超都市」の時代へ

⑤の「『大都市』の時代から『超都市』の時代へ」の都市づくりの変化については、藤村龍至UDCO副センター長に取材し、まとめてみた。「大都市」の時代は1968年都市計画法改正をうけて超高層ビルと郊外開発のセットで50年間走ってきた。現在の渋谷駅の大改造は「大都市」の時代の集大成とみる。一方、「超都市」のイメージは、情報ネットワークと東京周辺部のサブ東京の活用である。コロナ禍の在宅勤務による移動停止と分散業務体制が「大都市」の時代から「超都市」の時代への流れを急速化する。大宮が東日本の対流拠点として位置づけられているが、「対流」という考え方は「超都市」的といえる。GCS構想は「大都市」型で進んでいるので「大都市」から「超都市」への時代の流れからは矛盾を感じる。望ましい都市のあり方を集合知的に作っていくこと、再構築していくことが大切である。計算シミュレーションで説得していくやり方から、社会実験を繰り返し、実感のデータを出して説得していくことへ重きを置いていくことである。

大宮のまちの空間資源である 「余剰空間」の活用

コロナ禍を契機に求められる新しい生活様式を実践するために「都市空間の使い方」を考えてみよう。ソーシャルディスタンスを確保するためには、まちな余剰、余白となっている空間、さらに単機能としてしか使われていない空間をも「余剰空間」として位置づけ、公民が連携し、それぞれの都市空間から徹底的に掘り起こし、まちの空間資源として活用することが求められている。このことは、コロナ禍という「災害」の中で失われたまちの生活の資源を回復する力（レジリンス）を示す試みでもある。

単機能としてしか使われていない都市空間の事例としては道路空間がある。水川緑道西通線の道路用地の活用については、コロナ禍の前から既におみやストリートテラスとしてUDCOのコーディネートによる社会実験が積み重ねられてきている。さらに、コロナ禍を契機に見直された道路占用許可の緩和規定を適用して一番街の道路空間活用の社会実験も始まり、その有効性が実感されつつある。ステークホルダーの調整による社会実験の実績づくりが集合知をつくっていくプロセスの一つと言えよう。

先に紹介したジェイン・ジェイコブスは、まちを元気にする4大原則の一つに、「各地区は必ず二つ以上の働きを持たせること」を挙げている。おみやストリートテラスは、埼玉福祉保育専門学校やクラーク高校、芝浦工大などのコンテンツも複合型で組み込みつつも商業関係者によるまちの「余剰空間」の活用の取り組みが中心となっている。二つ以上の働きを持たせ、さらにまちの魅力を高めるためには、これまで大宮で取り組まれてきたアートフルゆめまつりのような文化活動をさらに加え、まちな余白となっている空間の活用を広げていくことが期待される。また、在宅を契機に市民が気付き始めた水川参道から、大宮公園、見沼田んぼという大宮の奥行と後背地の空間を多機能的に活かすことも求められている。「大宮駅東口の公共施設再編による連鎖型まちづくり」も公共空間の余剰と再編がテーマであることから、ウィズコロナとポストコロナの視点でまずは再点検をする必要がある。コロナ禍でも

とも緊張が強いられているエッセンシャルワーカーや生活困窮者の支援空間としての活用も検討に加える必要がある。繰り返しになるが、それが、コロナ禍という「災害」からの回復力（レジリエンス）を示すことにもなる。

大宮のまちの人的資源である 企画市民、現代版家守、 自治体職員、専門家のプラットフォーム

大宮には、コロナ禍の前から、働くことと生活を近づける新しい暮らしの萌芽を感じさせる先駆者達がいる。ポストコロナ時代のスタンダードとなるはずの都市と都市生活者との関係を予感させるこうした実践を本号では紹介した。大宮には、まちな「余剰空間」、余白や単機能としてしか使われていない空間を、活用したい、楽しみたいという「will」を持つ企画市民がいる。「このwillを持つ企画市民に会えるとうれしくてたまらない」、「企画市民100人と知り合いになる」と語る自治体職員もいる。まち場には、江戸時代、家主や地主に代わって家屋や家賃の管理だけでなく店子からの相談事までなし、地域の活性化まで担うタウンマネージャーであった家守（やもり）を彷彿させる「現代版家守」と呼べる方達もいる。UDCOというまちなマネジメントを担う専門家組織もでき、まちな「余剰空間」を企画市民とともに再構築するおみやストリートテラスなどの社会実験の取り組みも重ねられている。

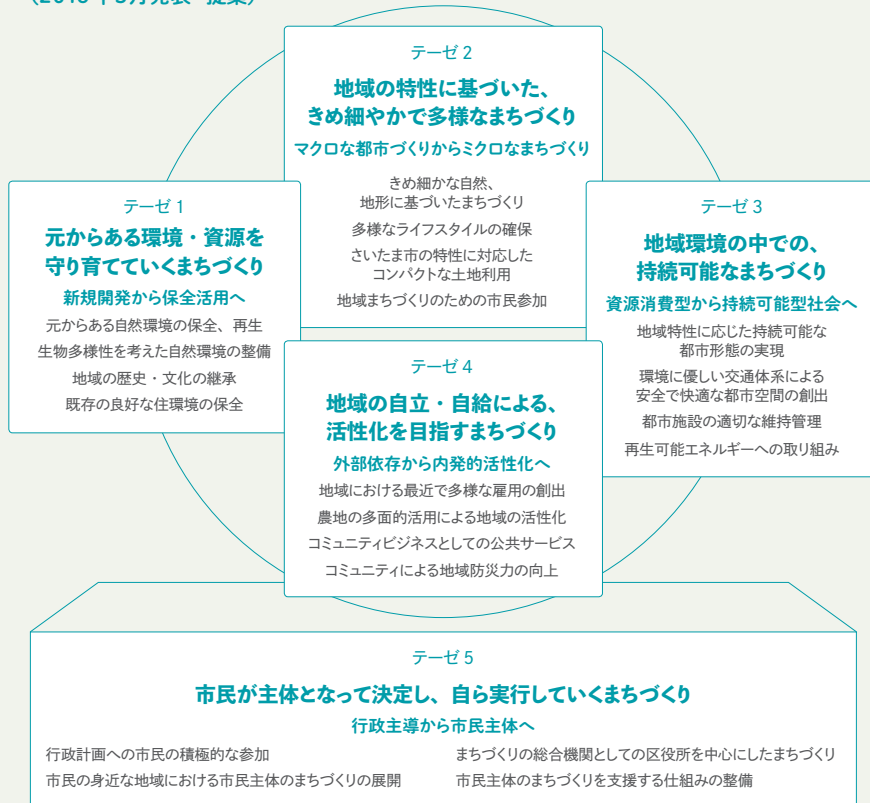
しかし、こうしたまちな人的資源と言える企画市民や、企画市民と連携する自治体職員、現代版家守、それを支援する多様な専門家たち、それぞれ相互の繋がりが、公民連携の観点からも、まだまだ弱いのではと感じる。魅力あるまちづくりは結局、人にある。大宮の空間資源を活用する主体となる企画市民、現代版家守と、それを支え、連携する自治体職員、専門家をつなぐプラットフォームが求められている。

つくたまの役割

都市づくりNPOさいたま（略称「つくたま」）は、市民のまちづくりへの参加を支援し、まちづくりへの新たな価値を提案し、具体的まちづくり活動を実践して、市民がまちづくりの中心にある社会を目指す地元の専門家集団であると自認している。別記の市民まちづくりビジョンを提案するなど、地元の専門家集団の立場でさいたま市のまちづくり行政を補完する役割を担おうとしてきた。一方、UDCOは都市再生推進法人としてさいたま市の委託を受け、大宮の公共空間のデザインとその実現のためのマネジメント体制を作り上げようとしている専門家集団である。本誌ではこうしたUDCOの取り組みを紹介するとともに、大宮のまちに働きかけ、まちをもっと魅力あるものにしたいというwillをもった企画市民や現代版家守と、そうした人たちと連携しようとする自治体職員を紹介した。気が付けば、本誌のような取り組みが、大宮のまちな空間資源を活かす人的資源としての企画市民、現代版家守、自治体職員、専門家達をつなぐプラットフォームの一つになっているのではと思う。つくたまは、ウィズコロナ、ポストコロナにあっても、こうしたプラットフォームの一翼を担い、都市の「余剰空間」を活かす人的資源の発掘と交流の場づくりをさらに進めることで、大宮のまちの魅力を高めていきたい。

今こそ見直したい「市民が考える さいたま市まちづくりビジョン」

(2016年3月発表・提案)



ビジョン提案の経緯

つくたまは創設以来一貫して、市民の自発的なまちづくり活動の促進と支援をミッションとしている。

2014年4月にさいたま市によって改定都市計画マスタープランが決定されると、さいたま・まちプラン市民会議という市民に開かれた議論の場を設け、熟議のうえの成果として「市民が考える さいたま市まちづくりビジョン」を2016年3月に発表・提案した。その提案の趣旨は以下の3点であった。

- 1 さいたま市を暮らしの場とする市民の立場から、生活のあり方に重点を置いて提案する
- 2 市民自らが考え、取り組むべきビジョンとして提案する
- 3 行政都市マスを、市民生活の視点から補完することを目指す

まちづくりの5つのテーマ

ビジョンの中核を成す論として、まちづくりの基本的な考え方を5つのテーマとしてまとめている。

この5つのテーマは20世紀の都市づくりに対するアンチテーマであり、互に関連している。〈1〉資源継承のまちづくり、〈2〉きめ細かなまちづくり、〈3〉持続可能なまちづくりの3つは互いに連携して進められ、それらを合せて、〈4〉地域活性化のまちづくりが行われる。また、これらすべてに共通して基盤となる考え方が、〈5〉市民主体のまちづくりと考えられる。

2020年のコロナ禍を経験した今こそ、将来に向けた大宮のまちづくりにこのテーマを当てはめて考えてみたい。本編で展開してきた論点、「蜜から疎へ」「地域にフォーカスした暮らし方、働き方の変化」「都市空間においても人的繋がりに関しても重視される多様性」「都市の余剰

空間や奥行きを再発見し柔軟に活用する企画市民」などは、まさに5つのテーマと呼応する論点である。つくたまはこれからも、市民とともに市民の目線、かつ専門家としての見識をもって、まちづくりの将来を考え提案する活動を続けていきたい。

INFORMATION

都市づくりNPOさいたまは正会員、賛助会員を募集しています。

正会員(年会費10,000円)

当会の趣旨に従って事業に主体的に参画していただける個人の方で、法律上NPO法人の「社員」となります。年度一回の総会に出席して議決権を有します。

賛助会員(年会費3,000円/口・年度を1口以上)

当会の趣旨に賛同し、資金的な支援をいただける個人または法人の方。法律上NPO法人の「社員」ではありませんが、当会から情報提供を受けられます。

都市づくりNPOさいたま情報紙「つくたま」の発行に協賛を募集しています。

協賛金10,000円でこの欄に協賛いただいた方の記事(広告やイベント告知等)を掲載いたします。

各お申し込み・お問い合わせは
右記「都市づくりNPOさいたま」まで

つくたまとは?

つくたまは、都市づくりNPOさいたまの愛称です。つくたまは、市民のまちづくりへの参加を支援し、まちづくりの新たな価値の提案や、具体的まちづくり活動を実践して、市民がまちづくりの中心にある社会を目指す特定非営利活動法人です。

つくたまの主な活動

調査及び研究事業	見沼田んぼ景観形成ビジョン研究会/埼玉県景観整備機構活動(景観DBの活用を含む)/高沼用水の整備に関する検討/つくたま塾の開催/さいたま百景普及活動/上尾市区画整理公園実施設計業務/上尾市大谷第四地区区画整理町界・町名変更検討業務/東大宮商店街地域つながり力アップ支援事業/埼大通り商店街地域つながり力アップ支援事業/5つのワーキンググループ活動
情報発信事業	Webサイト、FBの運用/つくたま情報紙の発行
普及、人材育成事業	研修旅行/講師派遣
コーディネート・ファシリテート事業	氷川杜のまちづくり協議会/JR環境空間「河童の森づくり」に関する支援/「河童ぶち公園整備」に関する市民参加のコーディネート/さいたま・まちプラン市民会議2015~2016/区民会議活動支援業務/アートフルゆめまつり事務局支援/岩槻・丹過長谷川蔵保全活用計画/さいたま市総合型地域スポーツクラブのあり方検討調査業務
市民活動支援事業	市内各地区の地区計画検討支援/芸術文化を活かした地域活性化事業~美術と街巡り・浦和
その他の事業	さいたま市福祉のまちづくり推進協議会/埼玉県景観審議会/つくたまアクションプランの検討/埼玉県景観アドバイザーとしての取組

特定非営利活動法人 都市づくりNPOさいたま

〒336-0917 埼玉県さいたま市緑区芝原2-16-21(地域生活デザイン内)
Tel & Fax : 048-876-1782 e-mail : jim@tsukutama.info http://www.tsukutama.info

